

都市の郊外化と言語境界線

ブリュッセル周辺の多言語地域の事例から

名古屋大学 山口博史

西ヨーロッパのベルギーでは、独立以来、蘭仏語話者間の対立（いわゆる言語紛争）があることが知られている。言語政策の属地主義化と 1970 年代にはじまった連邦化の進行にともない、両言語話者間の対立は一部緩和された部分もある。とはいえ、社会保障負担・給付の地域間バランスに関する問題、またブリュッセル周辺地域などの蘭仏語話者混住地域をめぐる諸問題など、今日的な問題はなお尽きない。

ここでは、特にブリュッセル周辺の蘭仏語話者混住地域をとりあげ、その形成と同地域の新住民たる仏語話者の状況を現地フィールドワークの結果に基づき報告する。報告では、最初に複雑なベルギー連邦・連邦構成体の諸機構を概観し、蘭仏二言語圏のブリュッセル都市圏とその周辺地域（蘭語圏）の各自治体が置かれた行政的位置を確認する。そのうえで、ブリュッセル都市圏の位置づけについて、現時点での筆者の分析枠組みを示す。

ブリュッセル都市圏の人口は長く増加傾向だったが 1960 年代から減少を始めた。その後、欧州統合の深化と欧州連合関係機関の集中的立地などもあり、1998 年から再び増加に転じている。それと並行して、ブリュッセル中心部からよりよい環境を求めて郊外（ブリュッセル周辺地域（蘭語圏））に移住した人の流れがあった（Deboosere *et al.*, 2010）。これらの人々の多くは仏語話者であり、かれらのブリュッセル周辺地域への移住は、一部の蘭語話者たちに「油じみ（Olievlek）」と呼ばれた。ブリュッセル周辺地域はこの移住の流れもあり、現在では経済的に豊かな仏語話者と蘭語話者の混住地域になっている。

このような仏語話者が、連邦化の進展にともなう蘭語系政府の属地主義的言語政策に対して、ブリュッセル周辺地域で運動を行なった事例がある。この運動は、仏語話者からの蘭語系政府への異議申し立てという意味で、「伝統的な」ベルギーの言語運動とは異なる面があった。報告ではこの運動の内部的な状況と外部環境について概略を述べる。また、両言語話者間を結合する活動事例の紹介を行なって、それらがどのように成り立っているのかについて述べる。

報告の結びで、ブリュッセル周辺地域での現代的問題は、ブリュッセル都市圏の郊外化に付随した現象であることを述べる。郊外化が既存の空間的言語境界と交差して生じたことによって蘭仏語話者の混住化がもたらされ、この地域でのさまざまな摩擦が生じる背景となったのである。秩序を欠いた都市の郊外化は、インフラストラクチャー整備や土地利用に関する論点と結びつけられて論じられることがしばしばであった。ブリュッセル都市圏の事例検討からは、都市圏をとりまく言語境界という別の要因を考慮することで郊外化に関する議論に新たな視角を加えることが可能なことが示されるであろう。

【参考文献】

Deboosere, Patrick *et al.*, 2010, « La population bruxelloise : un éclairage démographique », *La société civile bruxelloise se mobilise*, Le Cri édition.